

どんぐりに虫がいるわけ

3-10-1-1 v2

名前

音読サイン

公園で拾ったどんぐりを、ふくろに入れてしばらく置いておくと、白い虫が出てくる場合があります。よく見ると、実に小さな丸い穴が開いています。あの穴から、虫が入りこんだのでしょうか。

この虫は、ドングリゾウムシの子供です。親の虫は、細長い口を持っています。まだ木についているやわらかい実（み）に、その口で穴をあけ、中にたまごを産みつけます。

たまごからかえった子どもは、実の中身を食べて大きくなります。やがて実が地面に落ちるころ、自分の力で外がわに穴をあけ、はい出して土の中にもぐります。

つまり、あの丸い穴は入り口ではなく、出口だったのです。虫は、どんぐりがまだ木の上にあるうちから、実の中でしずかに育っていたのです。

(1) 「かえった」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

- ア もとのところへもどった
- イ 形がすっかりかわった
- ウ 水にぬれてしまった
- エ たまごから生まれた

(2) どんぐりに開いている丸い穴は、何だと説明されていますか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

- ア 虫が入った入り口
- イ 虫が出ていった出口
- ウ えだにつくための穴
- エ 雨水がたまる穴

(3) どんぐりの実にたまごを産みつけるのは、何という虫ですか。文しよから八字で書きぬきましょう。

(4) どんぐりの丸い穴は、どのようにしてできたのですか。文しよの言葉を使って書きましょう。

書くときのポイント

「あけた。」の形でお知らせる。
「中」という言葉を使う。

二人三きやく

3-10-1-2 v2

名前

音読サイン

運動会の二人三きやくの練習で、ぼくはゆうとと組むことになった。ゆうとはせが高く、足も長い。ならんで立つと、ぼくの頭は、ゆうとのかたのあたりまでしかとどかなかった。

内がわの足を、赤いぬのてしばる。走り出すと、すぐに足がもつれて、その場で止まってしまった。もう一度やっても同じだった。ぼくは、走るのがはやすぎるゆうとのせいだと思った。

見ていた先生が、「声を出してごらん。」と言った。ゆうとが「いち、に。」と大きく言い、ぼくもいっしょに言ってみる。ふしぎなことに、足がそろって前に出た。三步、四歩、五歩と進む。

止まらずにゴールまで行けたとき、ゆうとが手を上げた。ぼくはその手を強くたたいた。せの高さはちがったままなのに、走るはやさだけが、ぴったり合っていた。

(1) 「もつれて」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア からまっとうまく動かなくなつて

イ 力がつよくなつて

ウ 声が出なくなつて

エ まっすぐにのびて

(2) 二人の足がそろうようになったのは、なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア 声を出してかけ声をそろえたから

イ ぬのを取ったから

ウ 先生がいっしょに走ったから

エ ゆうとがおそく走ったから

(3) 二人の足をしばったものは何ですか。
文しようから四字で書きぬきましょう。

(4) 二人の走るはやさが合ったのは、なぜですか。
文しようの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝから。」でお知らせる。

「声」という言葉を使う。

かきがしぶいわけ

3-10-1-3 vi

名前

音読サイン

秋^{あき}になると、かきの木^きにだいたい色^{いろ}の実^みがなります。よくじゆくした実^みはあまいの^なに、まだかたい実^みをかじると、口^{くち}の中^{なか}がしびれるようなしぶさが広^{ひろ}がります。どうしてこんなにちがうのでしう。

しぶさの^なもとは、実^みの中^{なか}にある「しぶ」とよばれる^{みず}ものです。しぶは、水^{みず}にとけているときだけ、舌^{した}でしぶい^{かん}と感じられます。かたい実^みには、これがたくさんふくまれています。

実^みがじゆくしてくると、しぶは水^{みず}に^{かたち}けない形^{かたち}にかかります。中^{なか}にのこつてはいる^{かん}のですが、とけていないので、しぶさを感じ^{かん}ることができません。しぶが消^きえたのではなく、感じ^{かん}られなくなったのです。

では、なぜはじめはしぶい^なの^{そだ}でしう。中^{なか}のたねが育^{そだ}つ前^{まえ}に食^たべられては、こまる^みからです。たねがで^みきるころに実はあまくなり、鳥^{とり}に運^{はこ}んでもらうのです。

(1) 「じゆくした」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 地面に落ちた

イ 食べごろになった

ウ しぼんでかれた

エ 二つにわれた

(2) かきの実^みが、はじめはしぶいのはなぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 水が足りないから

イ 鳥がしぶさをこのむから

ウ 日が当たらないから

エ たねが育^{そだ}つ前に食^たべられないようにするため

(3) じゆくすと、しぶは何にとけない形^{かたち}にかかりますか。文^{ぶん}しうから一字で書きぬきましょう。

(4) じゆくした実^みがしぶくないのは、なぜですか。文^{ぶん}しうの言葉^{ことば}を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝから。」でお知らせ。

「しぶ」という言葉^{ことば}を使^{つか}つ。

コンパスのしくみ

3-10-1-4 v2

名前

音読サイン

コンパスを使うと、どこもゆがんでいない、まるい形がかけます。手でかいた丸は、どこかがくずれてしまうのに、コンパスならきれいな円になります。この道具には、どんなしくみがあるのでしよう。

コンパスには、二本の足があります。かくときは、まず針の先を紙にさして動かさないようにします。もう一つの足にはえんぴつがついていて、そちらだけをぐるりと回します。

このとき、二本の足の開きぐあいのはじめから終わりまで変わリません。だから、えんぴつの先は、針をさしたところからいつも同じ長さのところを通ります。その長さが半径、針の先が中心です。

コンパスは、長さをうつしとる道具でもあります。二つの点の長さに開けば、べつの場所に同じ長さをうつせます。円がきれいなのは、同じ長さを守りつづけるからです。

(1) 「ゆがんで」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 小さくなって

イ こくなくなって

ウ 形がくずれて

エ まっすぐになって

(2) コンパスでかいた円が、どこも同じふくらみになるのはなぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア えんぴつの先が細いから

イ 紙が白いから

ウ 二本の足の開きぐあいが変わらないから

エ ゆっくり回すから

(3) 針をさしたところから、えんぴつの先までの長さを何といただけますか。文しよから二字で書きぬきましよう。

(4) コンパスは、円をかくほかにどんなことができますか。文しよの言葉を使って書きましよう。

書くときのポイント

「長さ」という言葉を使う。

「〜ことができる。」の形で書く。

三十九このどんぐり

3-10-1-5 v2

名前

音読サイン

公園でどんぐりを拾った。ぼくたちはシートの上に集めて、一つずつ数えた。ぜんぶで三十九こ。「五人で同じ数ずつ分けよう。」と、みちるが言った。

一人七こずつ配っていくと、シートの上に四こ残った。「じゃんけんで決めよう。」「たくさん拾った人が、多くもらうべきだ。」だんだん声が大きくなって、だれも手を出せなくなった。

だまっていたあきらが、そこで口を開いた。「のこりは、木に返さないか。」ぼくたちが顔を上げると、あきらは四こをひろって、どんぐりの木のねもとにならべた。「ここから落ちてきたんだから。」

だれも文くを言わなかった。かえりぎわ、ぼくはねもとの四こをもう一度見た。同じ数ずつ分けられなかった四こだけが、みんなのものになったような気がした。

(1) 「ねもと」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア えだの先

イ 葉のうらがわ

ウ 木のとっぺん

エ 木の根のあたり

(2) 残った四このどんぐりを、あきらはどうしようと言いましたか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア じゃんけんで分ける

イ どんぐりの木のねもとに返す

ウ 先生にわたす

エ みちるにあげる

(3) 拾ったどんぐりは、ぜんぶで何こでしたか。
文しようから四字で書きぬきましょう。

(4) さいごに「ぼく」は、四このどんぐりをどう思いましたか。文しようの言葉を使って書きましょう。

書くときのポイント

「四こ」「か」「のこり」という言葉を使う。

「ゝ気がした。」の形で書いてよい。

月つきがついてくるわけ

3-10-2-1 vi

名前

音読サイン

夜よる、車くるまに乗のって走はしっていると、月つきがず
っとついてくるように見みえます。角かどをま
がっても、坂さかを下くだっても、月つきは同おなじとこ
ろにうかんでいます。いくら走はしっても、
いっこうに近ちかづきません。

そばにあるものを見みてみましょう。道みち
ばたの電柱でんちゅうは、少すこし進すすんだだけで、見み
える向むきが大きおおく変かわります。だから、す
ぐに後うしろへ流ながれていっいつてしまいいます。

月つきはどうでしょう。月つきは、地ち球きゅうからと
ても遠とほいところにありまあります。車くるまで何なんキ口
走はしったところで、月つきの見みえる向むきは、ほ
とんど変かわりません。ですから、いつま
でも正しょうめい面めんにいるようように見みえるのです。

つまり、月つきがついてきていいるのではあ
りません。近ちかくのものだけだけが後うしろへ流ながれ
ていくので、動うごかない月つきが、いっしよに
進すすんでいるようように見みえるのです。

(1) 「いっこうに」の意味に合うものを一つえらび、
記号に○をつけましょう。

ア すこしも

イ ときどき

ウ ゆっくりと

エ まっすぐに

(2) 月がついてくるように見えるのは、

なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 月が遠くに見える向きがほとんど変わらないから

イ 月が車をおいかけているから

ウ 月が光っているから

エ 道がまっすぐだから

(3) 少し進んだだけで、見える向きが大きく変わる
ものは何ですか。文しぶんようから二字で書きぬきましょう。

(4) 近くのものものと月つきとでは、どんなちがいが
ありますか。文しぶんようの言葉ことばを使つかって書きまかししよう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝが、ゝ」の形かたちで、くくらくべて書かく。

「向むき」という言葉ことばを使つかつ。

運動会の玉入れ

3-10-2-2 v1

名前

音読サイン

運動会で、わたしは玉入れの玉を数える係になった。かごの下に立って、玉を一つずつ取り出しながら、みんなといっしょに数を言うのだ。大ぜいの前で声を出すのは、得意ではない。

本番になった。白組のかごが下ろされ、わたしは玉を持ち上げた。「いち。」出した声は、自分でもおどろくほど細かった。運動場は広くて、声はすぐに消えてしまいそうだった。

ところが、二つ目の玉で「に。」と、たくさんの方が重なった。見ると、赤組の子も白組の子も、いっしょに数えている。「さん。」「し。」声はどんどん大きくなり、わたしの声はその中にとけていった。

「二十七。」さいごの玉を高くかかげると、運動場じゅうで手をたたく音がした。数えたのは、わたし一人ではなかった。声を出すのがこわかったことを、そのときだけわすれていた。

(1) 「細かった」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 早口だった

イ 小さくて弱かった

ウ 高くひびいた

エ 長くつづいた

(2) 「わたし」の声が気にならなくなったのは、なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア マイクを使ったから

イ 玉が少なかったから

ウ 係を交代したから

エ まわりの子もいっしょに数えてくれたから

(3) さいごに数えた玉の数は、いくつでしたか。文しようから三字で書きぬきましょう。

(4) 数えおえたとき、「わたし」はどんな気持ちでしたか。文しようの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

はじめの気もちと、おわりの気もちを両方書く。

「声」という言葉を使う。

トンボが空中で止まれるわけ

3-10-2-3 v1

名前

音読サイン

トンボが飛んでいるところを見ているとき、ときどき、空中でぴたりと止まります。まるで、見えない糸でつり下げられているようです。ほかの虫には、なかなかできないことです。

トンボのはねは四まいあります。前に二まい、後ろに二まいです。ちようやはちは、前と後ろのはねをつなげて、いっしょに動かしします。ところがトンボは、四まいを別々に動かすことができます。

前のはねを下げるとき、後ろのはねを上げる。このように時をずらして動かすと、体をうかせる力だけがはたらいで、前へ進む力は打ち消されます。だから、その場にとどまっていられるのです。

空中で止まれると、目の前を通るえものを、じっと待つことができます。四まいのはねは、トンボがえものをとらえるための、大切な道具なのです。

(1) 「打ち消されます」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 二ばいになります

イ 音が出ます

ウ なくなってしまう

エ 強くなります

(2) トンボが空中で止まっていられるのは、なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア はねが大きいから

イ 体がとても軽いから

ウ 四まいのはねを別々に動かせるから

エ 風がふかないから

(3) トンボのはねは何まいありますか。文しよから三字で書きぬきましょう。

(4) トンボは、どのようにはねを動かして空中で止まりますか。文しよの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「前のはね」「後ろのはね」の両方を使う。

「動かし」の形でおわらせる。

ボールがはずむわけ

3-10-2-4 v1

名前

音読サイン

ドッジボールを地面に落とすと、高くはね上がります。ところが、空気のぬけたボールを落としても、ぺたりと落ちるだけです。中の空気のあるなしで、どうしてこんなにちがうのでしょうか。

ボールが地面にぶつかったしゅんかん、当たったところがへこみます。すると、中に入っていた空気は、せまいところにおしこめられます。ぎゅっとおしちぢめられた空気ができるのです。

おしちぢめられた空気は、もとにもどろうとします。その力がボールの内がわをおして、へこんだところをふくらませます。このときボールは地面を強くおし返し、上へはね上がるのです。

空気の少ないボールは、へこんでもおしちぢめられる空気がありません。もどろうとする力が弱いので、はずまないのです。ボールがはずむのは、中にある空気のはたらきなのです。

(1) 「しゅんかん」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア とても長い時間

イ しずかなところ

ウ 高いところ

エ とてもみじかいつき

(2) ボールがはね上がるのは、何の力によるものですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア 地面のかたさ

イ おしちぢめられた空気がもとにもどろうとする力

ウ なげた手の力

エ 風の力

(3) ボールが地面にぶつかると、当たったところはどうかになりますか。文しようにから五字で書きぬきましょう。

(4) 空気の少ないボールがはずまないのは、なぜですか。文しようにの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝから。」でおわらせる。

「空気」という言葉を使う。

重さ当てゲーム

3-10-2-5 v2

名前

音読サイン

外で遊べない昼休み、そうだが「重さ当てゲームをしよう。」と言い出した。教室のうしろには、先生からかりてきたばかりが置いてある。じゅんばんにランドセルを持ち上げて、重さを当てるゲームだ。

はじめに、そうだがわたしのランドセルを持った。「これはニキロ。」つづけて、わたしも持ってみる。ずしりと来たけれど、ニキロもある気はしなかった。「一キロぐらいだと思う。」

はかりの目もりは、一キロ二百グラムを指した。そうたはくやしがった。でも、わたしも当たったわけではない。二百グラムもちがっていたのだから。

何回かやるうちに、気がついたことがある。ゆっくり持ち上げると重く感じ、いきおいよく持つと軽く感じるのだ。手はあてにならない。だからはかりがあるのだと、そのときはじめて思った。

(1) 「ずしり」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけよう。

ア おもみが手につたわるようす

イ かるくてうくようなようす

ウ つめたく感じるようす

エ 大きな音がひびくようす

(2) はかりではかったランドセルの重さは、どれだけでしたか。一つえらび、記号に○をつけよう。

ア 一キロ二百グラム

イ 一キロ

ウ ニキロ

エ 二百グラム

(3) 重く感じるのは、どのように持ち上げたときですか。文しようから四字で書きぬきましよう。

(4) 「わたし」が、だからはかりがあるのだと思ったのはなぜですか。文しようの言葉を使って書きましよう。

書くときのポイント

「ゝから。」でおわらせる。

「手」という言葉を使う。

くもの糸が切れないわけ

3-10-3-1 vi

名前

音読サイン

朝の草むらで、くもの巣が光っている
ことがあります。糸は、かみの毛よりず
っと細く見えます。それなのに、虫がい
きおいよくぶつかっても、巣はやぶれま
せん。

くもの糸を調べると、同じ太さの鉄の
糸とくらべても切れにくいと言われてい
ます。細いのに、鉄より強いのです。

強いだけではありません。くもの糸
は、引っぱられるとよくのびます。虫が
ぶつかったときには、のびながら、その
いきおいを少しずつ受け止めます。かた
いものは、いきおいをまともに受けて折
れてしまいますが、のびる糸は、力をに
がすことができるのです。

巣のたて糸はじょうぶで、横糸にはね
ばりけがあります。役わりのちがう二し
ゆるいの糸を組み合わせ、くもはあの
巣を作っています。同じような糸を作ろ
うとする研究が、今もつづいています。

(1) 「にがす」の意味に合うものを一つえらび、
記号に○をつけましょう。

ア ためておく

イ 外へ出して弱める

ウ 二つに分ける

エ もっと強くする

(2) くもの糸が切れにくいのは、強いことのほかに
どんなせいしつがあるからですか。一つえらび、
記号に○をつけましょう。

ア とてもかたいこと

イ まっ白であること

ウ みじかいこと

エ 引っぱられるとよくのびること

(3) くもの糸の強さは、何とくらべられていますか。
文しよから三字で書きぬきましょう。

(4) くもの巣が虫のいきおいでやぶれないのは、
なぜですか。文しよの言葉を使って書きましょう。

書くときのポイント

「ゝから。」でおわらせる。

「のびる」という言葉を使う。

自転車じてんしゃの車輪しゃりん

3-10-3-2 v2

名前

音読サイン

学校がっこうの帰り、自転車じてんしゃの後ろうしのタイヤが
ぺしゃんこになった。おして歩いていく
と、角かどの自転車屋じてんしゃやさんが出てきて、「見
せてごらん。」と言いった。

台だいに乗のせられた車輪しゃりんを、おじさんはゆ
っくり回まわした。ぼくは、そこではじめて
気がついた。車輪しゃりんには、まん中なかから外そとが
わに向むかって、細ほそい金きんぞくのぼうが何本
ものびている。

「これは、みんな同じ長ながさなんだよ。」
おじさんが一本いっぽんずつ指ゆびではじくと、どれ
も同じ高たかさの音おとがした。「一本いっぽんでもゆる
むと、まん中なかからのきよりがそろわなく
なる。そうすると、この輪わはもう丸まるくな
くなるんだ。」

なおった自転車じてんしゃをおして帰かえりながら、
ぼくは車輪しゃりんを何度なんども見みた。まん中なかから外そと
までが、どこも同じ長ながさ。それが丸まるいと
いうことなのだと思おもうと、いつもの車輪しゃりん
が、急きゅうにきれいなものに見みえてきた。

(1) 「はじく」の意味に合うものを一つえらび、
記号に○をつけましょう。

ア そつとなでる

イ 外へ引きぬく

ウ 指で強くはらって音を出す

エ 二つにおりまげる

(2) 車輪が丸なくなるのは、どんなときだと
おじさんは言っていますか。一つえらび、記号に○を
つけましょう。

ア タイヤがぺしゃんこになったとき

イ 雨にぬれたとき

ウ ぼうが一本でもゆるんだとき

エ ゆっくり回したとき

(3) 車輪の細いぼうは、何でできていますか。
文しようから三字で書きぬきましょう。

(4) 「ぼく」は、丸いとはどういうことだと
思いましたか。文しようの言葉を使って書きましょう。

書くときのポイント

「同じ長ながさ」という言葉ことばを使つかう。

「〜こと。」でおわらせる。

さつまいもがあまくなるわけ

3-10-3-3 vi

名前

音読サイン

(1) 「一気に」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 少しずつ

イ しずかに

ウ あとから

エ いっぺんに

(2) でんぷんがあまいものにかわるのは、どのくらいの温度のときですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 三十度から四十度

イ 六十度から七十度

ウ 百度

エ 二百度

(3) さつまいもの中にたくさん入っているものは何ですか。文しよから四字で書きぬきましょう。

(4) 石やきいもがあまくなるのは、なぜですか。文しよの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝから。」でおわらせる。

「ゆっくり」という言葉を使う。

石^{いし}やきいもは、とろけるようにあまくなります。ところが、同じ^{おな}いもを電子^{でんし}レンジ^{あた}で温^{あた}めても、あそこまであまくはありません。どうしてちがうのでしょうか。

さつまいもの中^{なか}には、でんぷんというものがたくさん入^{はい}っています。でんぷんそのものに、あまみはほとんどありません。あまくなるのは、これがべつのもにかわるからです。

いもの中^{なか}には、でんぷんをあまいものにかえるはたらきをするものがあります。このはたらきがいちばん進^{すす}むのは、六十度^{ろくじゅうど}から七十度^{ななじゅうど}くらいのときで、それより熱^{あつ}くなると止^とまってしまうです。

石^{いし}やきいもは、石^{いし}の熱^{ねつ}でゆっくりと温^{あた}まります。だから、六十度^{ろくじゅうど}から七十度^{ななじゅうど}でいるあいだが長^{なが}く、でんぷんがどんどんあまいものにかわります。電子^{でんし}レンジ^{あた}は一気^{いっき}に熱^{あつ}くなるので、かわるひまもなく百度^{ひゃくど}をこえてしまうのです。

ろうそくのほのおの形

3-10-3-4 v2

名前

音読サイン

ろうそくに火をつけると、ほのおは細長く上がった形になります。ろうそくをかたおけても、ほのおの先は、やはり上を向きます。どうして、いつも上にのびるのでしょうか。

ものが燃えると、まわりの空気があたためられます。あたたかい空気は、つめたい空気よりも軽いので、上へ上へとのぼっていきます。ほのおのまわりでは、いつもこの上向きの流れが起きています。

空気がの上向きの流れが起きています。空気がのぼっていったあとには、下からつめたい空気が入りこみます。この空気が、ものを燃やすはたらきをします。下から入って上へぬけるという流れが、ほのおを細く引きのばしているのです。

空気の流れのないところでは、ほのおは丸い形になることが知られています。ふだん見ているあの上がった形は、空気の通り道が、そのまま形になったものなのです。

(1) 「かたおけて」の意味に合うものをつつえらび、記号に○をつけましょう。

ア ななめにして

イ まっすぐ立てて

ウ 水につけて

エ 二本ならべて

(2) ほのおが上にのびるのは、なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア あたためられた空気が上へのぼるから

イ ろうが上にあがるから

ウ 風が下へふくから

エ 火が明るいから

(3) 空気の流れのないところでは、ほのおはどんな形になりますか。文しようにから二字で書きぬきましょう。

(4) ほのおのまわりでは、空気はどのように流れていますか。文しよの言葉を使って書きましよう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「下から」「上へ」の両方を使う。

「流れている。」の形で書いてよい。

持久走の目ひよう

3-10-3-5 v2

名前

音読サイン

十月に入って、持久走の練習がはじまった。五分かん走りつづけて、走った数を数える。ぼくは足がはいほうではない。はじめの練習では六周半で、組の中では後ろのほうだった。

二回目の練習では、後ろばかり気にしていた。だれかにぬかれるたびに、足が重くなる。まだ三周めなのに、走るのをやめたくなった。

終わったあと、先生が一まいのカードをくれた。走った数を書きこむカードだ。「くらべるのは、となりの子ではないよ。この前の自分と、くらべなさい。」ぼくはカードに、六周半と書いた。

三回目の練習で、ぼくは前だけを見て走った。ゴールの合図が鳴ったとき、七周を回りきっていた。じゅんいは前と同じ、後ろのほうだ。それでもカードに七周と書きこむ手は、少しふるえていた。

(1) 「ぬかれる」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 声をかけられる

イ 前に出られてしまう

ウ 名前をよばれる

エ しかられる

(2) 先生は、だれとくらべなさいと言いましたか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア となりの子

イ 先生

ウ 組でいちばんはやい子

エ この前の自分

(3) はじめの練習で走ったのは何周でしたか。文しょうから三字で書きぬきましょう。

(4) 三回目の練習で「ぼく」の手がふるえたのは、なぜですか。文しょうの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝから。」でお知らせる。

「この前の自分」という言葉を使う。

バッタの色

3-10-4-1 vi

名前

音読サイン

秋の草むらでバッタをさがすと、みどり色のものと、茶色のものが見つかります。同じしゅるいのバッタなのに、どうして色がちがうのでしょうか。

バッタをねらうのは、鳥やカマキリです。上から見おろされたとき、まわりの草と同じような色をしていれば、なかなか見つかりません。バッタの色は、かくれるためのものなのです。

あるしゅるいのバッタは、育ったころのようすによって、体の色がかわるところが知られています。青々とした草の多いところで育つとみどり色になり、かれ草の多いところで育つと茶色になります。

秋がふかまると、草むらはだんだんかれています。そのころには、茶色のバッタがふえて見えます。バッタは、いつものまにかまわりの色になって、私たちの目の前でかくれているのです。

(1) 「見おろされた」の意味に合うものをつえらび、記号に○をつけましょう。

ア こわがられた

イ おいかけられた

ウ 上から見られた

エ 名前をよばれた

(2) バッタの体の色は、何によってかわると書かれていますか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア 生まれた月

イ 食べたえさの量

ウ 育ったところのようす

エ オスカメスカ

(3) バッタをねらう生きものは、鳥のほかは何ですか。文しようから四字で書きぬきましよう。

(4) バッタが、まわりと同じような色をしているとよいのはなぜですか。文しようの言葉を使って書きましよう。

書くときのポイント

「ゝから。」でおわらせる。

「まわりの色」か「かくれる」という言葉を使う。

三倍のリボン

3-10-4-2 v3

名前

音読サイン

妹のたん生日に、リボンでかざりを作ることにした。箱の中から、赤いリボンと白いリボンを出してならべる。妹のは赤で十五センチ、わたしのは白で四十五センチに切った。

リボンをわたすと、妹は白いほうを指さして「こっちがいい。」と言った。「そっちは長すぎるよ。」と言っても、なっとくしない。長いほうがとくだと思っっているらしい。

わたしは、赤いリボンをもう二本、同じ長さに切った。三本を一本につないでゆかにおき、その横に白いリボンをおく。二つのはしは、ぴたりとそろった。「白いの、赤いの三倍の長さなんだよ。」

妹はしゃがんだまま、しばらく赤いリボンを指でなぞっていた。それから、赤いリボンを一本だけ持って立ち上がり、「これでいい。」と言った。三倍という言葉を、目で見ただと思う。

(1) 「なっとくしない」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 声を出さない

イ わすれてしまう

ウ いそがない

エ そのとおりだと思えない

(2) 「わたし」が赤いリボンをもう二本切ったのは、なぜですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア かざりが足りなかったから

イ 白いリボンが赤いリボンの三倍だと見せるため
ウ 妹が赤をきらったから
エ 白いリボンを短くするため

(3) 白いリボンの長さは何センチでしたか。
文しよから六字で書きぬきましょう。

(4) 妹は、三倍という言葉をもどのようにして分かったのですか。文しよの言葉を使って書きましょう。

書くときのポイント

「三本」という言葉を使う。

「く分かった。」の形でおわらせる。

落ち葉が土になるまで

3-10-4-3 vi

名前

音読サイン

秋の林を歩くと、足もとに落ち葉があつく積もっています。木は毎年、あれだけの葉を落とします。それなのに、林が落ち葉でうまってしまうことはありません。落ち葉は、どこへ行くのでしょうか。

落ち葉をそつとめくると、下からダンゴムシやミミズが出てきます。かれらは落ち葉を食べ、小さくくだいていきます。かびやきのこも、葉のかたいところをやわらかくしていきます。

小さくなった葉は、さらに目に見えない生きものにくずされて、色も形もなくなっていくます。しばらくすると、もとは葉だったとは思えない、黒っぽい土になります。

この土には、木が育つのにひつようなものがふくまれています。落ちた葉が土になり、その土でまた葉がしげる。林の中では、この行き来がくりかえされているのです。

(1) 「くだいて」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 小さくこわして
イ 高くつみ上げて
ウ 水に少しずつ

エ 新しく作って

(2) 落ち葉を小さくしていくのは、おもに何ですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア ダンゴムシやミミズ
イ 風と雨

ウ 鳥
エ 雪

(3) 落ち葉の下から出てくる生きものは、ダンゴムシのほかは何ですか。文しよから三字で書きぬきましょう。

(4) 落ち葉は、このあとどうなっていますか。文しよの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「ゝなる。」の形でお知らせる。

「土」という言葉を使う。

へちマのたわし

3-10-4-4 v2

名前

音読サイン

夏^{なつ}になると、へちマの実^みがなります。

わかいうちはやわらかく、料理^{りょうり}に使^{つか}えます。そのままにしておくと実^みはどんどん大きくなり、秋^{あき}にはかさかさにかわいてしまします。

かわいた実^みをふつてみると、中^{なか}で音^{おと}がします。わつてみると、あみの目^めのようなすじが、びっしりとつまっています。このすじは、実^みの中^{なか}で水^{みず}を通^{とお}していた細^{ほそ}い管^{くだ}の集^{あつ}まりです。

たわしを作るには、まだみどり色^{いろ}の実^みを、水^{みず}につけておきます。しばらくすると、皮^{かわ}とやわらかいところがとけてくれ、手^てであらうとすじだけが残^{のこ}ります。中^{なか}のたねを出^だして、ひなたでかわかせばできあがりです。

できあがったたわしは、水^{みず}をよくすい、かわきも早^{はや}く、長^{なが}く使^{つか}えます。へちマの実^みの中には、はじめからたわしの形^{かたち}があったのです。かわいて残^{のこ}ったのは、実^みをささえていたほねぐみでした。

(1) 「びっしりと」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

ア 少しずつならんでいるようす

イ すきまなくつまっているようす

ウ ゆっくり動くようす

エ 音を立てるようす

(2) たわしになるすじは、もともと何をしていたものですか。一つえらび、記号に○をつけましょう。
ア 実をあまくするもの

イ たねを作るもの

ウ 皮をまもるもの

エ 実の中で水を通していた細い管

(3) 手であらうと、何だけが残りますか。
文しようにから二字で書きぬきましょう。

(4) へちマのたわしは、どのようにして作りますか。
じゅんじよが分かるように書きましょう。

--	--	--	--	--	--

書くときのポイント

「まず」「つぎに」「やいごに」を使^{つか}って、じゅんに書^かく。
文^{ぶん}しよの言葉^{ことば}をそのまま使^{つか}ってよい。

夕方五時のチャイム

3-10-4-5 v2

名前

音読サイン

夏休みなつやすのころは、五時ごじのチャイムが鳴なっても、空そらはまだ青あおかった。ぼくたちは「あと一回いっかい。」と言っては、公園こうえんでサッカーをつづけていた。

十月じゅうがつのある夕方ゆうがた、同じチャイムが鳴なった。顔かおを上げると、空そらはもうだいだい色いろで、西にしのほうだけがぼんやりと明あかるい。ゴールのあみが、暗くらくてよく見みえなかった。

帰り道かえみち、ぼくのかげは、道みちのはしからはしまでとどきそうなほど長ながくのびていた。おかえに來た母ははが、「日ひがずいぶんみじかくなったね。」と言いった。同おなじ五時ごなのに、こんなちがうのかと思おもった。

つぎの朝あさ、ぼくはゆうとに言いった。「集合しごうを四時半よじはんにしよう。」ゆうとは少すこし考かんえて、「じゃあ、早はやく來ないとな。」と笑わらった。時計とけいの数字すうじは同おなじでも、外そとの明あかるさは少すこしづつかわっていく。

(1) 「ずいぶん」の意味に合うものを一つえらび、記号に○をつけましょう。

- ア ほんの少しだけ
- イ いつもと同じくらい
- ウ 思ったよりずっと
- エ これからだんだん

(2) 十月の夕方、チャイムが鳴ったとき、空はどうなっていましたか。一つえらび、記号に○をつけましょう。

- ア まだ青かった
- イ 雨がふっていた
- ウ だいだい色になっていた
- エ まっ暗だった

(3) 帰り道、道のはしからはしまでとどきそうなほど長くのびていたものは何ですか。文しよから二字で書きぬきましょう。

(4) 「ぼく」が集合を四時半にしようと言ったのは、なぜですか。文しよの言葉を使って書きましょう。

--	--	--	--	--

書くときのポイント
「ゝから。」でおわらせる。
「五時」という言葉を使う。